
新レーゲスタ創世譚 第一章 『ふたつの宝』

樽みのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新レーゲスタ創世譚 第一章 『ふたつの宝』

【Nコード】

N9262G

【作者名】

樗 みのり

【あらすじ】

闇を見透す、輝く金色の眼を持つ少年・カラ。身寄りのないカラは、不遇の日々の送る中、<闇森の主>と呼ばれる魔物の長と出遭い、取引をしてしまう。それは、思いもよらぬ長く、果てない旅への始まりであった。レーゲスタという大陸を舞台に、幼かった少年が、様々な人々と出逢い、挫折し、成長していく、という、定番な長編ファンタジーの第一章です。この章では、物語としてあまり大きな動きがありませんので、少々退屈かもしれませんが、気長にお付き合い頂けると幸いです。

序

序

原初、そこには何もなかった。

水も土も風も火も無く、天の下にあるものはただ、果てのない空間でしかなかった。

その様を憂えた陽の男神は、そこへ一つの種を落とされた。

数百の歳月が過ぎた頃、種は芽吹き、空間の中心に灰色の小さな塊が現れた。

塊は、数千の時間の中でゆっくりと成長し、ついには硬い、ごつごつとした島となった。

白き月の女神は、その子たる五人のエランを、この島へと送られた。

神の御子であるエランは、火水風地の精霊をお集めになると、何もない灰色の岩島を、これから生まれる命が暮らせる、豊かな大地に変えるようにとお命じにられた。

精霊達が大地を、生命の暮らす《家》に相応しく作りかえると、エランは母なる月から与えられた種をまき、大地を緑に染めた。

緑が大きく育つと、次に、エランは大地にある様々な物を集め、その血と息吹で、新たな生命を次々と創られた。

ビヤクシンの樹皮からは大毛長牛、黒櫨の幹からは力強い馬を、大ブナの葉からは大鷲、長柳の枝からは様々な水の民が生まれ、地に深く伸びる千年杉の根からは、深く力強い根の姿に相応しい、様々な異形のものをお創りになられた。

エランは、新しき生命ひとつひとつに《名》をお与えになると、

陽光の下に誘い、その生命がしかと存在する証である、《影》を持つことを確認なされ、祝福の言葉と共に、光ある世に放たれた。

しかし異形のもの達は、陽光の下に出されるを非常に怖れ拒んだため、終に、彼等には《影》が生まれることはなかった。

エランは、光の世に暮らすもの達と、光を怖れる異形のもの達を共に暮らさせるは困難と悟られた。そこで、異形のもの達には《名》を与えず、それ故に彼等は《影》を持たぬ、必要とせぬ闇の世界で暮らすよう諭した上で、夜の闇にお放ちになられた。

それらのもの達が、後には魔物に妖と呼ばわれる奴原となりゆくのである。

そして

すべての生命が自分達の暮らしを始めると、エランは最後に、艶やかな玉石の黒いものから男を、白いものから女を、最初の人間としてお創りになられた

《レーゲスタ大陸創世記より》

かつて、白き神の御子により創られたレーゲスタ大陸は、巨大なひとつの国であった。

早くに大、陸各地に己が棲み処を求め散った鳥獣とは異なり、数の少なかった人間達は、五人のエランの治める地 テイルナ で、静かに、争いのない日々を送っていた。

人間達はエランを、神とも親とも恐れ敬い、エランは、人間達を我が子の如く教え導いた。

人間達はエランの教えを、貪るように吸収していった。

だが、歳月が流れると共に、人間達は数を増やし、様々な考えを持つ者達が現れ始めた。

新しき者達は、鳥獣と同じくエランの下を離れ、新たな天地を求め旅立っていった。

だがこの時代、ティルナ 以外の地は、エランに護られ暮らししてきた人間達には、過酷極まる環境であった。

灰色の岩山が連なり、土は固く、その地で育つ植物達は、わずかな実りも出し渋った。

人間達よりも早く、それらの地へ棲み処を定め順応した獣達は、人間を己の糧のひとつとして襲い、闇に棲まう魔の物達もまた、新参者の人間達を餌食とし苦しめた。

想像だにしなかった新しい土地で、空しく命を落とす人間達は後を絶たなかった。

死に逝く者達は皆、エランの《名》を口にし、許しを乞い、残される、生きる者達への慈悲の手を求め息切れていった。

ティルナ で、彼等の嘆きの声を聴いた五人の御子は、終には、大陸の各地へ御身を参らせ、その地の人間達に救いの手を差し伸べられた。

その時から、五人の御子は大陸各地に分かれ住まわれるようになり、各々が赴いた地で、その地に住まう人間達がより良い暮らしを送れるよう、誠心を込めて導かれた。

数年の歳月が過ぎる頃には、エランの導きと人間達の努力が結実し、ティルナ に劣らぬ新しき町や村が、大陸の各地に誕生していた。

だが、人間達の世が安定し、その繁栄も疑いの無いものとなり始めた矢先、エランは忽然と、人間達の前に姿を現さなくなった。

極稀に、月下に佇む白銀の姿を目にする者があったが、いくら呼

びかけたとしても、エランはその口から言葉を紡ぐことは無く、いくら近付こうとしても、塵気楼の如く、決して近付くことは出来なかった。

それは大陸何れの地でも同じであった。

何が、エランの不興を招いたのか。

人間達は全く見当がつかず困惑をした。

ある者は、エランの不在を大いに怖れ、その姿を、財を打つてでも探し求めた。またある者は、自分達人間にとって、エランの存在は既に不要だと主張し、エランを探し求める者達を嘲った。

ある年。

大陸各地で、魔物、怪といった奴原が人里近くに現れては、人間達の生活を脅かし、更には疫病が蔓延し、次々と老人や幼子の命を奪っていった。

不幸はそれだけに留まらず、ある地では日照りが続き、地に在るものを灼き尽くた。

またある地では間断なく雨が降り、大地を水底に沈めた。

人間達は、如何なる術も持ち得なかった。

繁栄を謳歌していた都市は、死者の都となり、緑豊かだった田園は、広大な砂漠へと変貌していった。人間達は、その変わりゆく様を見ていることしか出来なかった。

その地獄のような時代は八年間続いた。

終わりの見えぬ、地獄のような日々に疲弊しきつた人間達は、終に、始まりの地である テイルナ に集い、この 原初の地 に神殿を築き、自分達の祈りの声をエランに届けることを一致して決断した。

築かれた壮大な神殿には、大陸中の人間が集った。

祭壇にエランの御姿を映した像を祀り、最上の香を焚き、花を飾り、供物を捧げ、新月の宵から終月の曙まで、二十八夜不断の祈りを捧げた。

人間達の、この切なる祈りの声に感銘を受けたエランは、その使
いの童子を人間達の下へ遣わされ、再び人間と共にあることを誓約
されたという。

エランの言葉が届けられた、三日後の新月が昇ると共に、人間達
を苦しめていた一切の災厄は去り、かつてと変わらぬ安寧の世が戻
ってきたという。

この後、聖都 テイルナ に続き、他の四大都市にもエランを祀
る神殿が築かれ、それらの神殿を中心に、人間達の住まう地は、エ
ランの庇護の下、大陸の隅々にまで広がっていった。

ここに、人間の世の広がりと共に、世に広まった一篇の詞がある。
何者が、何時の時代、何の為に詠んだかは伝わっていない。

だが、この詞は時間の流れの中で消え去ることなく、今も密やかに語り継がれている。

*

全能なるものはない

神は神であり

精霊は精霊であり

人間は人間である

そも 問う

全能とは何か

如何なるを 全能なるものというのか

ある者がいう

そは遍く事象を制するものと

ある者は言う

そは天地無窮を知り 源と終を判るものと

そしてまたある者は言う

そは欠けることなき満月の如く

完全なるものであると

もしや

全能足り得るものがあるとす

そのものは

全能であるが故に失い

失うが故に欠けざるを得ず

欠けざるを得ないが故に

完全足りえない

故に我思う

全能であるを求めらるは

哀れなるかな

全能であるを求めらるるは

哀れなるかな

* *

これら全ては神話の時代の伝え語り。

けれど

それがすべての、始まり

序（後書き）

次回、 1：金の瞳の少年 より、話は本編に入り
主人公が登場します。

1：金の瞳の少年

1：金の瞳の少年

『そなたの持つ、『ふたつの宝』をよこすならば、私はそなたの望むものを与えよう』

闇森の主 から、カラがこう言い渡されて一週間がすぎた。

「僕の持つ『ふたつの宝』って、なんのことだろう？」

自分が今年何歳になるのか、カラは知らない。 親の顔も知らない。

いま暮らしている家は、大陸東南部オリアス地方にある、オーレンという田舎町の、刀鍛冶の納屋の二階で、ただ寝るためだけの場所でしかなかった。

掃除や家畜の世話などの雑用と引き換えに、寝床と日々の食事を与えられるだけの、雇われ者の少年に、他人が欲しがるような品物をもつゆとりなどあるはずもなかった。

自分のものといえたのは、今着ている冬用の他に夏用のシャツが一枚と目の荒い布地の外套が一枚、生まれた時に親がくれたのである。名の刻まれた円形の木彫りのペンダントがひとつあるだけだった。

「けど、千年を生きる 闇森の主 があるっていうんだから、きっと何かあるはずなんだけど……」

灯りのない納屋の寝床で、すぐ脇の窓から入る、あるかないかの薄い月の光を感じながら、カラは自分の三つの持ち物をじっくりと眺めた。

狭い室内は埃っぽく、古い薫の臭いがこもっていたが、窓際になれば、春の柔らかかで新鮮な空気がたっぷりと吸えた。遠くから、フクロウのゆったりとした声が、同じ間隔をおいて聞こえてくる。声の方角に目をやると、夜空よりも濃く重い黒の闇が、カラの暮らすオーレンの町の北側に広がっているのが見える。

闇森 だ。

じつと、吸いつけられるように黒い森に目を向けていたカラは、ゆっくりと手元に視線を戻した。

闇に白く浮かぶ手の中のは、どれをとっても値打ちがあるようには見えない。他に何か、自分の忘れている（それとも知らないのか）物があるのかもしれない。

しかし、ゆっくりと考えている時間はない。闇森の主は、終月の晩までに宝を渡すか否かの決断をするようにと、期限を切っていた。

終月の晩とは今晚のことだ。

「せつかくのチャンスなんだ　う、いた、いたた……」

片膝を立て、屈むように座っていた身体を伸ばそうとすると、右肩と横腹に熱い痛みが走り、カラは思わず身体を丸めこんだ。

肩を押さえるように下を向くと、今度は肩が左頬にあたり、さらに痛む箇所が増え、短い唸り声をあげる。

カラは左頬に、手をそつとあてた。

昼、主人に殴られたあとが未だに熱く、腫れているが見えなくてもわかった。

主人の留守中、鍛冶屋のおかみから掃除を言い付かったカラは母屋に入った。居間の壁には主人の鍛えた剣が飾ってあった。黒くなめされた皮の鞘に収められた剣の細部には、銀と緑の貴石で細かな装飾が施されていた。窓から入る淡い光を受け、柔らかな光を返す剣の飾りを、カラは思わず手にとり見入った。

ただ、美しいと思った。そして、こんな剣を振るい戦う騎士となった、自分の姿を想像した。

輝く 八芒日月 の徽章を胸に、白銀の剣を振るい、暴虐をはたらく悪い領主や、人々の暮らしを脅かす異形の化物達を退治した僕は、颯爽と馬に乗って町へ帰る。そうすると、人々は熱烈な拍手と笑顔で迎えてくれる。ああ、そこに綺麗なお姫様なんかいるともっといいのに。“ありがとうございます！ さすがは 方円の騎士団 一の武勇を謳われる騎士様だ” “あなた様の無事なお帰りを、私達は信じておりました” って、僕の手をとりながら喜ぶんだ

たとえ今はこんなでも、どこかで自分にもそんな輝かしい道があるのではないか、そんな空想をしている時が、カラの唯一の楽しい時間であった。

空想にふけていたカラは、主人が帰ってきたことに気付くのが遅れた。

背後に気配を感じ、振り返った瞬間、皮の硬い、大きな肉厚の手がカラの左頬を強烈な勢いで襲った。

何も構えもなかったカラは、勢いよく張り飛ばされ、肩と横腹を、強かに床に打ちつけた。

「このガキ、やっぱり本性を現しやがったな。 この盗っ人の宿無

しめが！」

肉付きのよい大柄な主人の顔は耳まで真っ赤になり、小さな見開かれた目には、ぎらぎらとした怒りが満ちていた。

「いつかはやると思っていたんだ。おめぐみで置いてもらっているのに、主人の物に手を出すとは、役にも立たないくせに、まったく恩知らずなガキだ。ええい、役人に突き出されなくなかったら、とつととうせやがれつ。おめえみたいな生っ白い気味の悪い目のガキに、いつまでも居座られたら迷惑だ」

主人はカラを盗つ人と決め付け、カラが口を開こうとするスキを与えなかった。

そもそも、色白で身体が小さい流れ者のカラを、鍛冶屋の主人はなから気に入っていない。不器用で、言いつけられた仕事の三回に一回しくじりをするカラは、主人の気に入るような働きができるとはいえなかった。

カラよりおそらく数歳か上の職人見習の若者達は、出身もはつきりとした者達ばかりであり、また、鉄を鍛える仕事に就くだけあり、カラとは比べものにならないほどたくましく大きな身体をしていた。仕事ぶりも要領よく、主人の目に見えるところでは熱心に働いていた。主人にとって、若者達のそのような身体条件も仕事への態度も、ごく当然のものであり、また、そうでなければ雇う価値もないと考えていた。

しかし、主人がカラを嫌悪する一番の理由は、その瞳の色にあった。

これまでも多くの嫌悪と罵りを集めてきたカラの金色の瞳は、金属のように光を受けると強く輝き、また、光のない真の黒闇の中でも、まるで煌々と輝く満月のように、自らが光り輝いた。更に

この金の瞳は、暗闇に隠されたものを、日中に見ると変らぬ視界で、カラに具に見せてくれた。

ただし、闇の中でも物が見えることは、周囲の者達には決して知られないようにしていた。暗闇で目を利かせる必要のある存在には、獣の他に夜盗がいる。

苦い過去があった。

四年は前の話になるが、人買いの商品となった時だった。真の闇中でも目が不自由なく見えるということを知られ、盗賊の一味に買われた事があった。考えるまでもなく、夜盗の片棒を担がされるはめになった。

拳句、ヘマをしてカラだけが捕縛され、盗賊一味の残党という罪状に加え、その金の瞳が 魔性の穢れた眼 として、公開処刑を行われる寸前までいった。

だがこの時、奇跡としか言いようがないことが起こった。

たまたまカラの処刑を耳にしたその都市の有力者から、「まだ幼子だ」という旨の口添えがあったらしく、大変寛大な措置として、その都市からの遠地追放だけで済んだのだった。

助かりはしたがあの事件以来、瞳は、ただ 金色 で 光を放つだけの「特異体質」、ということを押し通している。

闇夜で見えるにしろ見えないにしろ、蔑む周囲の眼差しに変わりはないのだが、嫌悪や侮蔑的発言を受ける以外の、要らぬごたごたに巻き込まれることは、とりあえず避けられている。

だが、ごたごたには巻き込まれないにしろ、濃い茶か黒色の瞳が多いこの南部オリアス地方では、光り輝く金の瞳など、奇異以外の何ものでもなく、また、そのような面妖な眼を持つ存在は、獣かこの世ならざる存在 たえば闇森に住む魔物のような《名》も《影》も持たぬ存在だけであるという、古い伝承を頑なに信じ、次の代へ伝え続けている村人達にとっては、カラに対する態度は、至極当然の反応だったのだろう。

そんな伝えを信じきる主人が、雑用役とはいえカラを雇ったのは、

小さな子供が住む家も食べる物もなくさまよっていることを憐れと思った、人の良いおかみと、この家の娘の口添えがあったからだ。

この場合も、おかみと娘のとりなしで取りあえずはおさまったが、主人がカラへの疑いを捨てていないことは明らかだった。三人いる見習の若者達が、遠くから楽しむように見ているのが目の端に入った。若者達の忍び笑う声が耳に入り、悔しさで頭を上げられずにいると、自分の名を呼ぶ気遣わしげな声が、頭上でそっとささやいた。

「カラ、気にしないで。父さんは古い言い伝えを信じる人だから、あんたの瞳をあんなふうに嫌うけど、私は綺麗だと思うよ」

顔を上げると、娘のフォーリンが憐れむような瞳で、カラを見つめ微笑んでいた。

オーレンでは珍しいフォーリンの青い瞳の中に、無様に座り込む自分の姿があった。

眩暈がした。殴られた痛みが頭の芯を痺れさせ、何もかもが白く霞んで映った。これらのことは全て誤解だと、自分の口から言いたかったが、口の中はからからに干からびて、ひとつの言葉も、ひっかかり出てこなかった。

その場を開放された後、カラはずっと灯りのない納屋の二階にもった。腹は鳴るが、食事を取りに行く気には到底なれなかった。

腹は食事を取りに行かないカラを責めるように、苦しげに不満の声を上げ続けている。

打ち身の痛みだけでも辛いのに、内側からまで、絞るような嘆き声と痛みを与えられてはたまったものではない。

「うるさいなつ。　僕が食べたくないっていつてるんだから、お前もそう思えよつ。　お前も僕の一部だろう？　くそ、くそ」

目をぎゅつと閉じて藁のベッドの上に身を投げると、涙が溢れてきた。　鍛冶屋の主人の一方的な仕打ちへの憎しみ、自分を助けてくれた娘の憐れみの眼差しへの羞恥。　そして、そんな目で見られる自分自身への怒り。

何が一番自分を苦しめているのか分からなかった。　もしかしたら、もつと他のことが、自分をこんなに惨めな気分に行っているのかも知れない。

こんな生活から、こんな自分から抜け出したい。　変わりたい。

ドロドロしたこの思いは、昨日今日生まれたものではなかったが、いよいよ大きく押さえきれないものになっていることを、カラはじりじりと感じていた。

この状況から抜け出すためには何が必要か。　カラはいつも考えていた。

金？それとも、誰にも負けない力

鍛冶屋の主人を、これまでにカラを罵ってきた人々を見返せるよ
うな、誰にも見下されたくないようなものになりたい。

具体的に何にになりたいのかなんて、カラ自身も分からなかった。
ただ、周囲の人々を見返してやることができるのなら、何になるのもよかった。

フクロウの声は途切れることなく耳に入ってきていた。

一回、二回、三回……。　我知らず回数を数えていたカラは、十

を数え終えると、乾きかけた目元を袖口でこすり、ベッドから跳ね起きた。床に散らかしていた自分の持ち物を胸元に突っ込むと、ぐらつく梯子をすべるように降り、外に出た。

いまにも消えそうな細い月は、周囲のものを明るく照らし出しはしなかったが、大気には甘い春草の香りが満ち、その存在を自ら示していた。

カラは大きく息を吐き出すと、黒い森へと駆けだした。

1：金の瞳の少年（後書き）

次回、「2：闇森の主を求めろ」に続きます。

2： 闇森の主 を求める

2： 闇森の主 を求める

オリアスは、レーゲスタ（北方民族の古い言葉で“無窮”を意味する）大陸の東南部に位置する、温暖で気候にも恵まれた穏やかな平野地帯で、オーレンはその南部にある、歴史ある静かな田舎町だった。

東都ルーシャンと南都アル・ハラスをつなぐ大街道から、内陸にかなり入り込んでいるため、特段の用も無くこの町を訪れる旅人はまずいない。しかし、近郊に良質の砂鉄を産出する地があることから、この町では古くから鍛冶を生業とする者が多く、殊に、この地で鍛えられる刀剣類の質の高さには定評があったため、それらの品を求める騎士や商人の姿を、時折目にすることがあった。

闇森は、そんなオーレンを威圧するかのように、町の北辺に延々と広がる、黒く深い古の森であった。

昼なお光の薄い闇森には、様々な魔物や古の精霊達が棲んでいるのだと、迷信深い土地の人々は信じていた。

不可思議な力を操る精霊や魔物達は、好んで光の少ない森などに棲むといわれ、特に魔物は、闇を好むと云われる。

その棲まう地を侵さねば、決して自ら人間に危害を加えることはないが、知らぬうちに怒りを買ひ、手酷い仕返しを受けたり、悪くすれば命を奪われたりしたという話は、いたるところで耳にするものだった。

故に、人々はそれら異形の隣人の住まう地を恐れ、不用意には近

付かぬようにしていた。

オーレンに人間が住み始めたばかりの頃、闇森は 常春の森 と称され、光豊かな、緑と花と鳥獣達の生気に溢れた美しい森だったのだと、昔語りには謳われているが、現在の暗く重く沈んだ様を見て、そのような話を信じる者はまずいない。

いつからか、森には光が減り、獣達の姿よりも、異形の魔物の影が目立つようになった。

闇が濃くなるほどに、人間達は森を怖れるようになっていった。森に魔物が増え、闇が濃くなったのは、 闇森の主 が、森の沼沢に棲みついたからだと言う者もあったが、はっきりしたことは誰も知らなかった。

闇森の主 とは、あらゆる魔物や妖を統べる 魔物の王 だと言い伝えられている。

その姿は、千年を生きた大蜥蜴とも、巨大な熊の変じたものとも、人の世を追われた、魔法使いの成れの果てだとも云われていた。

千年の時を生き、人語を解するというこの魔物は、深い知恵と怖ろしい魔力を持つといわれ、また、様々な力を宿す貴重な宝を、多数隠し持つとも云われていた。

闇森の主 は、近づく人間に害をなすこともあれば、気まぐれに知恵や力を授けること、また稀には、己の宝を分け与えることがあるのだという。

昔、一人の男が終月の晩に、 闇森の主 に出会い、大変な宝を授かったという話が伝わっている。

それは、如何なる富や名声にも勝る、至上の宝であり、それを所

持する者の、あらゆる願い叶える、如願の秘力を有していた。

男は、自分の持ち物と引き換えに、闇森の主 からその宝を得たのだという。

オーレン近隣の村の、ただの牧童だった男は、宝の力を用い、手始めに呪術師として商いを始めた。

凄まじいまでに優れた術を操る男を、当時の南都の王は、王宮付きの術師として取り立てた。

数々の功績を上げた男は、貴族の身分を与えられ、終には、オリアス一帯を治める領主にまで上りつめた。

美しい妃を迎え、豊かな土地を我が物とした男。しかし、決して人前に姿を現すことはなかったのだという。その妻とすら、御簾越しにしか、声を掛け合わなかったと、昔語には語られる。

何故、男が人々の前に姿を現さなかったのかは、何も語られてはいない。しかし人々は、魔物などと取引をしたために、男自信も醜い魔物になってしまったためだと信じていた。

領主となった男が、その後どのように暮らし、いつ、オリアスの地を去ったのかは何も伝わってはいない。ある話では、姿を見せぬどころか、領主としての勤めすら果たさぬ怪しげな呪術師を、魔物の手先と怖れたオリアスの民が、東都と南都の王に要請し、打ち倒したのだとも言っている。

今では年寄りが子供に聞かせる、定番の昔話となったこのようなたわいもない話も、カラにとっては魅力的で、都合のよい希望を与える話だった。

もっとも、カラに限らず、闇森の主 の宝に心魅かれた異郷の者や、勇気と力を自負する若者達が、森の奥深くへと分け入ることは、さして珍しいことではなかった。

ただし、無事に戻ったものが幾人いたのかも、知られてはいなかったが。

「うわっ
」

頭上で、枝葉を揺らし飛び立つ鳥の羽音が響き、地面に寝転がっていたカラは、慌てて上半身を起こした。

オーレンの納屋から勢いづいて駆けてきたものの、森に入りしばらくすると、脇腹や肩の痛みが思い出され、走り疲れたこともあって、地面に転ぶように寝転がってしまった。

納屋を出る前、無理やり胸元に押し込んだ持ち物は、転んだ勢いでシャツの内から飛び出し、周囲に散らばってしまった。

唐突に降り落ちてきた音に、落ち着きかけていた心臓が、痛いくらいに激しく打っている。急に起き上がったので、腹や肩もまた熱く痛んだ。

耳障りな、叫びのような声を上げて羽ばたいた鳥の、次第に小さくなる声に耳をすませながら、カラは流れてもいない額の汗を拭いた。しばらくすると、森は遠方に聞こえるフクロウの、規則正しい声だけが聞こえる闇に沈んだ。カラは小さく息を吐き出すと、また草の上に寝転んだ。

カラが踏み潰し、下敷きになっている伸び始めたばかりの若草から、青い、ツンとした爽やかな匂いが漂ってくる。その匂いを嗅いでいるうちに、早かった心臓も、思い出した肩や腹の痛みも、少しだが、楽になっていく気がした。

ほう、と深く息を吐くと、カラは腹に力を入れるように声を出した。

とにかく何かを声に出し、気持ちを紛らわせたかった。

「驚かすなよな、まったくさ。あー、でも、僕が驚かせたのかな。こんな夜中に人間が来るなんて、ないだろうから……」

目の上にかかっていた前髪の束を、指先でつまむと、顔の前でひらひらとさせてみた。

黒すぎる髪は、カラの周囲を包む闇に溶け、白い指で持っていないかしたら、そこにあるのかないのかも分からなかった。

オーレンの人々も、髪は黒か濃い茶が多かったが、ここまで黒い髪はそういなかった。

フォーリンの長く編んだ髪も、暗い室内では、カラに負けぬ濃い色をしていたが、光が当たると、柔らかな栗色だった。

ボロボロの汚れた服に青白い肌、黒すぎる髪に、獣のように光を放つ金の瞳。他人から形容されるままの自分の姿を想像して、カラはまたため息を吐いた。

「僕のせいでもないんだけど。全部、僕のものなんだよなあ……」

鳥の飛び去った方角に目をやると、木々の葉の隙間から薄白い、線のような終月がちらりと見えた。明日から三日間、月は天から姿を消す無月となる。

か細い月はようやく、東の空の中ごろに來ていた。

おそらく、鍛冶屋では皆が居間に揃い、主人は酒、おかみと娘のフォーリンは暖かな香茶でもすすり、寝る前のひとときを楽しんでいる頃だろう。

こんな見た目でなかったら、せめて鍛冶屋の弟子の奴等みたいだったら、僕もあの席にまけてもらえたかな？

“さあ、今日はカラの好きな甘い蜜菓子もたっぷりあるから、ゆっくりフォーリンと話していらっしゃい”

“カラ、今日はジマー（チェスのような盤ゲーム）をしましよようよ”
なんて、時間が経つのも忘れて、話したり遊んだりしてさ

目を閉じ、もしかしたら、の空想をしていると、ぐぐう、と腹がまた不満を訴え、カラを現実に取り戻した。

朝、薄い野菜のスープと硬いぼそばその黒パンを一切れ食べて以来、胃袋には何も入れていない。ぐうぐうぐうぐう、と急かすようになり続ける腹の音に、カラはいらいらと声を上げた。

「うるさいって、いったらう！ しかたがないじゃないか。何にもないんだから。もう少し先の季節だったら、白かけ野苺くらいなつてたかもしれないけど。」
闇森の主　に会えたら、なんか食べる物、魔法で出してもらえないかなあ……」

遠く離れた闇の先から、フクロウの、変わらないゆったりとした声が聞こえてくる。

一回二回三回　。

数えているうちに、納屋を飛び出した時の勢いが段々と萎んでいき、替わる様に不安が、むくむくと膨れ上がってくるのを感じた。

「本当に、主　は今晚会ってくれるのかなあ。あの時だって、声はしっかり聞こえたけど、姿はチラッとしか見せなかつたし。」

「だいたい、言われた『ふたつの宝』ってのが、何かわかんないまままだし……」

一週間前、この森に入ったのは昼間だった。

あの日の朝、鍛冶屋の主人に薪を割り補充をしておくように言いつけられたカラは、命じられただけの薪を割り、薪小屋に積み重ねる作業を黙々とやった。積み重ねられた薪の山はカラの背より高

く、最後の数本を積むには、爪先立った上に、腕をいっぱい伸ばさなければならなかった。

最後の一本を置いた瞬間だった。後ろ膝に何か硬い物が当たり、カラはがくりと、薪の山にしがみつくような姿勢で倒れた。

いつせいに崩れる薪の音は、鍛冶場にいた主人の耳にもすぐに届いた。逆光でよくは見えなかったが、とんできた主人の顔は真っ赤になり、こめかみの筋は浮き出していただろう。

主人より先に薪小屋の入り口に立っていた見習の若者達の口の端には、明らかな笑いがあつたように思う。

主人は数発の平手を与えた上で、その日の昼食と夕食をカラから奪い、薪を元通りに積んでおくことを命じた。

腹はこの時も不満を訴え続けていた。薪を積み上げる音よりも大きく響く腹の音は、カラに決断と行動を促しているようだった。

その音に押されるように、カラはふらりと小屋を出ると、町を全力で駆け抜け、まっすぐに闇森に入り、そしてついに、闇森の主人の声に会い、あの言葉を投げかけられたのだった。

遠く、はつきりしなくなったフクロウの声を、カラは注意深く耳で拾った。

四回五回六回。

十を数え終わると、カラはのろりと立ち上がり、散らばった持ち物を拾い上げ、沼沢に向かい、再びゆっくりと歩き出した。

昼ですら薄暗かった夜の闇森は、息苦しいほどの濃い闇に沈んでいた。

身体にねっとりまとわり付くような、冷たく黒い闇は、まるで、森に入り来るものを拒むように、じわじわと圧力をかけているようだとかラは感じていた。

伸び放題の下草が、カラの足取りをさらに重いものにしたが、カラはゆっくりと、だが確実に、前回 闇森の主 と逢った、巨岩のある沼のほとりを目指した。

鍛冶屋の主人達が嫌う金色の瞳は、暗闇の世界を、昼と変わらぬままに、鮮やかにカラに見せてくれる。

他の人々が、闇の中でどのように物が見えるのか、カラにはよく分からなかったが、暗闇でも目が利くという点だけでみれば、どうもカラは特をしているようにも思えた。

だからといって、この濃く黒い闇に、全く何も感じないわけではない。周囲の様子が見えたところで、ここは人間中心の町ではなく、獣や鳥達の 魔物や精霊達の暮らす別の世界なのだ。

それでも昼間には、地まで届かないながらも、木々の葉の遥か先に、太陽の暖かな存在を感じることで、なんとない安心感があつた。しかし、今そこには暖かな陽ではなく、消えかけの細い月が静かにあるだけだ。

出遭いこそしていないが、この闇の何処かに、人間の来訪を喜ばぬ魔物が潜んでいるかもしれないという恐怖は、常に脳裏の隅にへばり付いていて、消しようがなかった。

「せめて満月だったら、もう少し心強かったのに……」

『ならば、満月の晩に来ればよいものを』

ししし、という笑いと共に、その声は、投げつけられるように前方から飛んできた。

しゃがれたその声は、口から発しているというよりは、腹か喉の

奥で響かせているような、独特のこもった音をしており、壮年から中年の男のものだろうと思われた。

突然の、聞覚えぬ声との遭遇に身体を硬くすると、カラは注意深く、前方のあらゆるものに視線を注いだ。天を突くように伸びる樹の太い幹、葉を広げ始めた大羽シダの若い芽。それらの間に「つごととした大岩が数個、空から落とされたかのように、大地に深く突き立っている。

そのうちの一つに、カラは明るい緑色の光を一つ見た。目を凝らしよく見ると、猫ほどの大きさの、暗黄色の身体をした蜥蜴が、こちらをじっと、見ているのが分かった。

その左眼は、潰れてないようだった。

「闇森の主　　じゃないよね。　　声がこの前と違うから。　　何？　　あんた、ただの蜥蜴？　　それともこの森に棲むっていう魔物のひとつ？　　ああ、でも人間の言葉を喋ってるんだから、ただの蜥蜴じゃあ、ないだろうけどね」

カラは拳をぎゅっと握りしめながら、視線を外すことなく問いかけた。言葉の最後が、少し震えてしまったが、それでも出せる限りの大きな声を、腹の底から絞った。

岩の上の蜥蜴は、しばらく沈黙をしていたが、やがて、右だけの光る眼を細めると、またしししと笑い、言葉を口にした

『内心は恐怖が大渦をなし、押し流されてしまいそうなくせに、人間の小僧が、なかなか頑張るではないか。　　もっとも、ワシの声が聞こえるのであれば、ただの小僧、というわけでもあるまいが』

「え？　　なんで？　　だって、あんたは人間の言葉で喋ってるじゃないか」

カラは膝が震えるのをごまかそうと、右足を大きく一步、前に踏み出した。

『ワシの言葉を、人間で聞けるものがあるとなれば、魔法使いか精霊使い、そう、あとは、ワシと相性のよい獣騎士くらいであるうよ』

蜥蜴は、ちらちらと舌を出しながら、カラの姿をじっくりと眺めた。細めた右目は、笑いを含んでいるようだった。

『しかし、お前は今のところそのどれでもないな。ただの人間の小僧。しかも、あまり運に恵まれず、その日その日を生きるだけで精一杯。もったいなや。その金の瞳。古の民の血を引く証。しかし、その瞳が悩みの種。その瞳が為、幾度となく辛酸をなめた。この世に良きことなぞ何一つ無い。だが、どこかに望みをつなぎたい、そのきっかけを、この闇森の中に求めに来た闇森の主の言い伝えに心を惑わされ、それにすがりに来る人間の、いつの時代も尽きぬことよ』

最後にししし、と笑うしゃがれ声に、カラはカツとなり、足元に転がる石を拾うと思いきり投げつけた。石が岩に当たる乾いた音が、森の間に幾度も吸い込まれていく。

膝の震えはいつの間にか止まっていた。

蜥蜴は、するりするりと飛んでくる小石を避けては、変わらずに細めた右目をカラに向けていた。

「くそつ、逃げるなよ！ 当たらないじゃないか。くそつ。分かったようなことばかり言いやがって。お前なんか用はないんだ。僕は 闇森の主 に会いに来たんだからなっ」

足元の小石を投げつくしたカラは、もう一度岩上の蜥蜴を睨み付けた。それから、興奮を押さえるように大きく息を吸い、吐き出すと、拳を堅く握り、目的地へと歩みだした。

沼沢は、もう目と鼻の先のはずだった。

『物のやり取りは、ようく考えることだ』

カラの背後に、蜥蜴の笑いを含まない声が投げつけられた。カラは肩越しに振り返ると、声の主にむっつりと応えた。

「考えるって、何をさ」

『言葉のままさ。得るものと失うものの価値を、現在 だけを見て計りだすと、後悔することになるだろうと、親切なワシからの忠告だ。行おうとする事が真に正しいかどうか、よく考えてから、起こすことだな』

「僕のやることが、正しいか正しくないかなんて、魔物のあんたになんか、言われたくないね」

カラは叫ぶように言い返した。

『もちろん決めるのはお前だ。そしてその結果を身に受けるのも、な』

言葉を終えると、蜥蜴はするりと岩から下り、その姿は見えなくなった。

カラが、見えぬ蜥蜴の姿を見出そうとした時だった。

『待っていたぞ』

その男の声は、
闇の深遠から滲み出す夜気の如く、
聞く者の心を、
凍えさせた。

2： 闇森の主 を求める（後書き）

次回、「3： 駆け引き」に続きます。

3：駆け引き

3：駆け引き

振り向いたら、そこには何がいるのだろう。

言葉にはしきれない恐怖が、カラの身体を硬く縛った。止まっていた膝は、また小刻みに震えている。

この声…… 闇森の主 だ

頭の中で、自分を叱咤する言葉がぐるぐると回っている。何か言わなければ、と気ばかりが焦っていく。

なのに、何か言葉を出そうにも、唇は縫い合わされてしまったかのように動かない。

闇森の主 は、最初の一言以外、何も言葉を発しはしない。

その重い沈黙が、カラの肩に背に、覆い被さるようになるのしかかり、息をすることすら、大変な苦勞を感じるほどだった。

その重圧に抗うように、カラは堅く目を瞑り、頭を数回振ると、それまで以上に大きく目を開いた。

「？」

目を開いたにも係わらず、周囲にあるものが霞んで見え辛い、とカラは感じた。

目に映るはずの景色が、次第に不鮮明になっていく。

視界の変化に伴うように、周囲の気温は急速に下がってゆき、手足の先に、じんと、痺れるような鋭い痛みを感じ始めた。吐く息は、見えるほどに白い。

あまりの急激な冷え込みに、カラの身体は自然、大きく震えた。しかしその震えが、硬直してしまっていた手足に、かえって動きを取り戻させた。

大きく息を吸い吐き出すと、カラは、蜥蜴のいた大岩に向けたままだった視線を、まず、自分の白い右手に戻した。

目に映る右手は、濁水に沈めているかのように、黒い薄膜に包まれ、その輪郭は、次第次第に曖昧に、判然としなくなっていく。

「もしかして、闇が濃くなってる？」

カラは右肩越しに、恐る恐る視線を背後へ移した。

音は、全くなかった。

先刻まで、遠くに聞こえていたフクロウの声も、今は全く聞くことができない。

闇を見透す、カラの金の瞳にすら、何も見せぬほど、どろりと濃くなった黒の闇。

震える膝に言うことをきかせ、カラはなんとか身体ごと、声のした闇へと向きなおった。

しかし、どうしても 闇森の主 の姿は見出せない。カラの記憶に違いがなければ、この闇の少し先には、ホソバナラの木々に囲まれた穂長葦の茂る沼があり、その中心には、カラの背後の大地に突き立つ巨岩よりも、遙かに大きい、小山のような岩が、座すようにあつたはずだ。

それらの存在も、闇に溶けてしまったように、全く、見ることが出来なくなっていた。

他の奴等も、月のない夜だとこんなにな、何も見えないのかな？

なるほど、これでは自由には動けないものだ、軽い驚きをカラが感じていると、黒闇から、男の低い笑い声が、再び闇から滲み出るように聞こえてきた。反響でもしているのか、その声は、幾重にも重なってカラの耳に届いた。

先程の蜥蜴とは違い、しゃがれのない、なかなか渋い声なのだが、同時に、闇夜の湖の水のように冷たく凍え、重く陰鬱な圧力を、聞く者に感じさせる。

主 というだけあり、ある種の威厳すら帯びるその声は、抑えた笑いを漏らしているだけだった。だが、襟元から氷水を流し込まれたかのような、無機質で寒々しい印象をカラに与えた。

胃は縮み、凍った手で心臓を掴まれているような気分だった。頭は縛られるような痛みを感じ、自分の体内を流れる血の音が、妙に大きく耳に響いた。

一週間前の昼に聞いた時、その声に、こんな得体の知れぬ怖ろしさは、ほとんど感じなかった。このような、不快な恐怖を感じていれば、カラはいま、ここに来ていなかった。

頭上の木々の隙間から、西により始めた終月の片端がちらりと見えた。

だけど、もう来てしまったんだ。そうだよ、これは、チャンスなんだ！

ぎゅつと目を瞑ると、カラは大きく息を吐き出し、吸った。凍えた空気が、吸い込んだ鼻腔や喉に鋭い痛みを与え、意識をはつきりとさせてくれる。

数回大きく呼吸を繰り返すと、堅く握った拳で膝を叩き、その震えを戒めた。

震えより、叩く痛みを感じるようになって、カラは再び大きく目を開き、見透せない闇を見据えた。

「よかったよ。主は僕のことなんか忘れて、来ないかと思っ
ていたんだ」

出せる限りの大きな声を出した。

無駄なことだとは思ったが、怖れを、主 に悟られたくはなかつた。そのためには大きな声で、自分の調子で、話を続けなければいけないと思った。

何もしない沈黙の間をつくと、この重く黒い闇に押し潰されそうになる。

カラは、胸元に無理やり押し込んでいた持ち物を、投げるように大地に放った。

「これが、僕の持っている物だよ。ああ、あと今着ているシャツも入れてだけど。この継ぎだらけのズボンと靴も、お望みとあらば、数に入れてもらってかまわないよ？ もっとも、この靴なんて、もう三年は履きっぱなしだから、底の皮はすっかり擦れて、もうないうようなもんだし、サイズがとうに合っていないから、踵なんて、すっかり踏み潰しちゃったけど、これでも履かないよりは、指先くらい守ってくれるよ」

喋っているうちに、カラ金の瞳は、黒すぎる闇に次第にだが、確実に慣れていった。

よくよく見てみると、正面の闇の中心に、周囲よりもより濃い真の黒が、この闇の芯のように存在していることが、何となく見分けられるようになった。

もっとよく注意して見ていると、闇の濃さには数段階あり、主のいるらしい闇の中心は、穴でも開いているかのような底の無い、

純粋な黒色をしており、その芯から離れていくほどに、黒の闇は、青や緑といった、色味を帯びていくようだった。

真ん中の、深い黒。 あれが、 闇森の主 なんだ

『先日、そなたは言った。 自分を見下してきた者共に、違う自分を、見せつけたい 見返せるだけの力が欲しい と。 その望み、変わらぬか?』

抑揚のない、無感情の低い声が、カラの上から問いをかけてきた。 闇森の主 の眼は見えないが、冷たい眼で見下ろされていると、カラは確信に近い感覚を覚えていた。

「うん。 お金や宝石なんて…… あつたらそりや嬉しいけど、そんなの僕が急に持ったら“盗んだ”っていわれて、殴られるだけだし、使えばなくなるもの。 そんな使えばなくなるものじゃなくて、ずっと使える 僕に力を与えてくれるものがいい。 魔法の道具とか、呪文とか」

闇森の主 は、しばし沈黙した後、カラが最初にばらまいた品を一瞥したようだった。

『これらを そなた真に、自分の宝だと、考えておるわけではあるまい? よもや、これらと、私に求めるものを、同等に考えておるわけでは、あるまいな?』

痛いところを突かれた。 たしかに、求めるものに対し、こちらが示す《ふたつの宝》の候補は、あまりにも酷い、とカラですら感じていた。

「だ、だって、僕の持っているものなんてこんなものしか……。で、でも、そりゃ、主にとつてはボロ布か玩具にしか見えないだろっけれど、僕にとつては、大切な財産なんだ。それとも……なに？ 《宝》ってというのは、ひょっとして僕の命？」

やや間を置き、闇森の主はそれまで以上にゆったりとした口調で、カラに問うた。

『ならば如何する？ やめるか？』

「否定しないってことは そうなの？」

寒さのために震えていた肩や膝は、さらに大きく震えた。口の中が一気に干からび、言葉がまた、口の中で張り付き、詰まりそうになる。

まっすぐに、闇の芯を見ていることができなくなったカラは、足元に視線を彷徨わせた。

どこかで想像はしていた。

しかし、主の要求する《宝》はふたつ。だが、命は当然ひとつしかないので、数が合わない。

それに、闇森の主と取引をしたという男の話では、男は生きて森を出て、成功を収めたのだから、こちらが渡す《宝》が、命のはずはないと、都合の悪い悲観的な考えを、意識的に打ち消していた。

『さて。そなたが怖ろしいからやめる、というのであれば、私は構わぬ。何をするも、所詮、私の気まぐれ』

闇森の主は、決して急がず、じれったいほどにゆったりと問

を置いて、ようやく次の言葉を口にした。

『そう、そういえば、そなたに遇った数日後にも、一人の若者が、この森に入ってきた。そなたより数歳か上。栗色の髪に、焦茶の眼。左腕に大きな火傷跡のある、なかなか体躯のよい。その者からは、火と鉄のにおいがした。あれは、鉄を扱う生業の者だろう。まだ、見習といったところだろうが、あれも、私を探しに、ここへ参ったものであろう』

鍛冶屋の、一番古い弟子の顔が浮かんだ。

栗色の髪、焦茶の瞳。何より、左腕の大きな火傷跡。長身で、カラを見下し眺める切れ長の目の、トランという弟子の高慢な顔が、目の前にいるかのようにはつきりとカラには見えた。

自分では直接何もせず、他の二人の仲間に指示をし、カラに陰湿な嫌がらせを、しかも、フォーリンの目に着くところでしくじるように仕掛けてくる。そしてその結果を、自分は後方で、口の端に笑いを浮かべながら眺めているだけなのだ。

トランという名を思い浮かべただけで、カラは、胃の辺りがむかむかと気持ち悪くなった。

「そ、そいつにも、《ふたつの宝》を持ってくれば望みを叶えるって言ったの？」

焦り、早口で話すカラの様子を楽しむように、闇森の主は低い笑いを漏らし、一拍を置いて、カラの問いを否定した。

『私は、先約を重くみる。もっとも、そなたが止める、というのであれば、次に遇った者に、同じ呼びかけをするやもしれぬ。かの若者は、望むもの大きく、明確な先の野心をも抱いていた様子。』

恐らくはまた、諦めきれずに、参るであろう。』

「だ、誰もやめるなんて、言っていないじゃないか。でも、命を取られたら、望みを叶えてもらったって、何にもならないから。そ、それに、そうだよ。考えてみたら、僕は《ふたつ》宝を渡すのに、僕の望みはひとつだけなんて、不公平じゃないかつ。それに、本当にあんたが僕の望みをかなえることができるのかも、わかんないじゃないかつ」

沈黙が、カラと 闇森の主 の間に流れた。

依然、膝は震えていたが、大声で捲くしたてたお陰か、気が少し楽になっていた。

カラは身構えるように、黒闇の中心を睨みつけた。

『 闇森の主 に喰ってかかるとは、そなた、度胸があるのか、それとも 』

闇森の主 の声は、変わらず平坦であったが、その音程が、多少高くなったようにカラは感じた。

こんな声の変化をよく聞いている。笑っているのだ。

顔には極力出さず、心の中で、その状況を楽しんでいる時の弟子達の声が、普段よりも多少高くなることを、カラは知っている。

その上がりかたと、似ている。

『 よかろう。 対等の数をそなたにも与えよう。 しかし、まずはそなたが、そなたの《宝》を渡すこと、受け入れるか否か、答えを貰おう 』

「え、あの、うん、その《宝》って……」

『私が望むもの 《ふたつの宝》とは、そなたの《名》と《影》』
カラの心の内を見透かすように、 闇森の主 は、さらりと、カ
ラの求める答えを口にした。

カラは一瞬意味が分からず、すぐに反応の言葉が出てこなかった。

「《名》と《影》？ 《な》、って名前のこと？ 《かげ》って
あの光に照らされるとできる、影のこと？」

『如何にも。 その《名》と《影》だ。
身分高き存在になるほど、《名》は長く複雑になり、それに従い、
《名》は強く大きな力で、その《名》の主を護る。 《名》の持つ
力は、己が主人 魂を、その器たる身体に繋ぎ止めるもやい綱。
綱が太く、多い程、その護りも強くなる。 強き《名》を得た器
にのみ《影》は従う。 多くの者は、何者かが与えた第一の《名》
しか持たぬ。 第二の《名》、一族の《名》を、持っておったとし
ても、それを当人が知らぬ。 当人の知らぬ《名》は、主を結びと
める力は弱く、《影》もまた、曖昧な《名》には、付き従わぬ』

闇森の主 の語ることは、カラにはさっぱり理解できなかった。
むしろ 主 は、カラが理解できぬことを知った上で、語ってい
る様でさえあった。

だが、そんなことはどうでもよかった。 カラにとっては、命が
取られるのではない、という確認が出来れば十分だった。

「細かいことはあんまり、その、分かんないんだけど、《名》
と《影》。 それを渡すだけでいいの？ そんなものとの交換で、
本当に、僕の望みを叶えてくれる？」

束の間の沈黙の後、闇森の主は、より重々しく、答えを口にした。

『叶えよう。だが、ひとつだけ忠告をしてやろう。《名》を私に渡すということは、そなたは二度と《名》を持ってぬということだ。如何なる《名》、もだ。そなたは《名》を持ってぬ存在となる。受け入れるか?』

カラは笑いだしそうだった。

《名》《影》。そんなもので済むのなら安いものだ。どちらも生きていく上で、何の役に立ったこともなければ、あったところで何の役に立つとも思えない。

「構うもんか！　いまだって、僕の名を呼んでくれる人なんて、フーリンぐらいしかいないんだから。影だって、いつも薄暗い場所にはかり追いやられているんだから、ないも同じだよ。《名》《影》を渡したからって、僕の姿形が代わるわけじゃ、ないんだよね?」

『形状は変わらぬ。では、成立だな』

「あ、で、でも　まず、僕の願いをひとつ叶えてくれなくちゃ、あなたの力が本当かわからないよ」

慌てて、自分を先にするようにというカラに、主は、はつきりとした笑い声を聞かせた。

『証明　ということか。よかるう。では、まず何を望む? 漠然としたものを望んでも、証明にはならぬぞ。目に見え、結果がすぐ分かるもの、でなければな』

「た、たとえば、そうだ。僕を誰にも負けない力持ちにとか、できる？ ほら、ここらにあるような大岩を一人で、腕一本で持ち上げられるようなさ、昔語りに出てくるような剛力の英雄みたいに」

とつさに口をついて出た望みだったが、チビで非力と馬鹿にされていたカラにとって、逞しい身体や腕力のあることは、憧れの一つに違いなかった。

『容易いことだ』

あまりにも簡単に承諾されたことに、カラが呆気にとられていると、闇森の主は、言葉とも唸り声ともつかぬ、抑揚の無い歌のような連続した音声を漏らし始めた。それはまるで、喉の奥深くで幾多の音を共鳴させているような、低く、不気味な揺らぎのある音だった。

耳慣れぬ、地を這うような歌が終わると、黒闇の中から突然ぬつと、枯れ枝のように干からびた、節だらけの浅黒い手が突き出された。カラは反射的に、身を後方へ引いたが、右腕を掴まれ動けなくなった。

カラの右腕を掴んだ主の枯れ枝のような手の力は、その見た目からは想像も出来ぬほどに強く、カラは骨が砕けるのではないかと思った。カラの怖れなど知らぬように、主はいま一方の手を突き出すと、ゆつくりとカラの額に指を押し付け、数回低い声で呪文のような言葉を呟いた。

闇森の主は枯れ枝の手を、カラの額から腕へと下ろすと、ゆつくりと確かめるように両腕をさすり、最後に腹の前で腕を交差させ、何かをその腕に念じ入れるように、ひとつの言葉を低く長く唱えた。

カラの両腕は、主の言葉に応えるように、薄青白い光を、内

側からぼんやりと放っている。

最後の息を吐き出すと、主は枯れ枝の手を、するりと黒闇へ引き戻した。

氷のように冷たい、がさがさと干からびた主の指の感触が、触れられた額や腕にいつまでも残り、全身が総毛立っていた。

掴まれた右腕は、薄いミミズ腫れのように赤くなっていたが、痛みはあまり感じられなかった。

主に触れられた部分をさすりながら、カラは腕を改めてまじまじと見つめた。

いまはもう光っていないその腕は、相変わらず白く、ひよろひよろと細い。何も変わったようには見えない。力が湧き出すような感覚も、何もない。

「これで、終わり？ 力持ちにしてくれるって、何も……。腕も身体も何にも変わってないよ」

明らかに不満を感じさせる声で、カラは呟いた。もっと、見た目にも遅しくなっていることを想像していたため、何も変わっていないことに、裏切られたような気持ちになっていた。

『そなたの望みは身体的な「力」であって、外観上の変化は含まれていないと思うが？ まずはそれ、その大岩で試してみてはどうだ』

言われるままに、ふてくされた顔でカラは、蜥蜴のいた見上げる大岩にふらふらと近づき、ゆっくりと右手を押しあてた。

こんな大岩。こんなひよろひよろの腕で、動かせるわけないじゃないか

やはり、闇森の主にいいように扱われているだけなのだ、と

いう思いが心を捉え、カラはなんとなく腹がたってきた。

「ぐっぐつとした岩の、冷たく硬い感触を手の平に感じながら、カラはそこに全神経を集中させた。

いいじゃないか。　なくて、もともとなんだから

諦めにも似た不満を込め、カラはぐつと右手に力をいれた。

ズズツと、右手に音とも響きともつかない、鈍く重い感触が伝わった。

聞き違いかと思い、カラはもう一度、先程よりさらに右手に集中し、足腰もしっかりと据え、力を加えてみた。

ズズズツと、地をえぐるような重い地鳴りを伴い、大岩がカラの押す方へと移動したことが、今度ははつきりとわかった。

足もとには、岩の動いた分だけ大地にいびつで深い、大きな溝ができています。

「うごいた……本当に、動いた　！」

カラは呆然と自分の右手を見た。

そして、改めて大岩を睨みつけると、今度は両手をしっかりと岩にあてた。　大きく息を吸い込むと、全身の力を込めるように、大岩をぐんと押した。

「動、けええ　」

カラは、これまで出したこともない大声を上げた。　大岩は、そ

んなカラの声をいとも簡単に掻き消す、重い地鳴りを生じ、動いた。　冷たく静まり返っていた闇森を、激しく振わせる轟音。　眠りを

覚まされた鳥や獣達が慌て逃げ去る音が、方々から聞こえてくる。

大岩は、意外に地下の部分が浅かったのか、カラに押されたことでバランスを崩し、周囲の木々を巻き込み横転し、大地を激しく震わせた。

倒れる際に巻き上げた、泥と土埃が顔にかかり、カラは激しく咳き込んだ。

咳き込み、涙目になりながらも、カラは大岩が自分の手に押され倒れる瞬間の、ふっと軽くなった感触を思い起こしていた。

これが本当に、僕の力？ 本当に

薪の束を二つ抱えるにも苦勞をしていた自分が、大人が五・六人かかって掘り起こすのも苦勞しそうな大岩を、たった一人で動かした。こんな力は、どんなに身体が大きく屈強な男でも、そうはなかに違いない。トランなんか、目じゃない。

咳が落ち着くと、カラは改めて自分の手を、宝物でも眺めるように見つめた。

『どつだ』

「うん。すごい。こんなの、本当にできるなんて。すごいや」

カラは夢見心地で自分の手を見続けていた。

『では、そなたのいまひとつの望みを聞こう。それを叶えると、そなたの《宝》を貰うを、同時に行う。それで、よいな』

「いいよ」

カラは、細い月を探すように空へと目を向けた。そして、独り

言のように、もうひとつの望みを呟いた。

沈黙の後、 闇森の主 は低く、抑えるような声で確認をした。

『その願いは時を要する。 が、それでもかまわぬというのだな』

たったいま、 闇森の主 の力は証明してもらった。 もう、迷
う必要はなかった。

カラはまっすぐ、 主 のいる闇の芯を見つめ、無言で頷いた。

『では、まずそなたの《名》を貰おう。 通称や愛称ではない、そ
なたの知るそなたの《名》を、その口から明かすのだ』

いまではすっかりこの黒闇になれたカラの瞳に、一瞬だが 闇森
の主 の顔が見えた。

蜥蜴や大熊などではない、人間のものだった。 俯き気味のその
顔は、頬骨から顎へと、スツと削がれたような、鋭角な三角計を思
わせるように尖った、異様なまでに肉の削げた、面長なものだった。
ほんの僅かな肉、筋、皮膚で繋がっているだけの、昔墓場で見た
骸骨と、大差ないように思えた。

ただ一点、墓場の骸骨と確実違っていたのは、落ち窪んだ眼窩の
底で、鮮赤色の眼が、いままた燃え上がるうとする熾きの不滅の輝
きのように、不気味に揺らめき輝いている。

その赤い眼を、長く正視することは出来なかった。 理由は分か
らなかったが、とにかく、その赤い眼に見られているということが、
凍えて死んでしまいそうな程に、怖ろしく耐え難いことに感じられ
た。

赤い眼の 闇森の主 の口元は しかめているのか笑っている
のか、奇妙に歪んで見えた。

『《名》を、明かすのだ』

変わらぬ平坦で単調な物言いだった。

しかしその声に、それまでにはない有無を言わさぬ、束縛するよ
うな、残酷な響きをカラは感じた。背筋にぞつと悪寒が走り、身
体は、きつく縛められたかのように硬直した。

「カストラーン」

無意識のうちにカラは、自分しか知らぬ通称ではない《名》を、
すっかり干からびた口から絞り出していた。

『カストラーン』

闇森の主 がカラの《名》を口にした瞬間だった。

再び突き出された 闇森の主 の枯れた手から、青白い光の珠が
生じ、それはカラの頭上に舞い上がるや、強烈な閃光を放った。

それまで光のなかった闇森の、あらゆる物を差し貫くように、四
方八方に放たれた青白い光線は、大地に、貫いた物それぞれの姿を
切り取った、濃い影を生んだ。

突然の光に目を眩ませていたカラは、地面に着く足の裏から、ず
るりと、体内から何かを引きずり出されるような感覚に襲われた。

光が弱まり始めると、戻ってきた周囲の黒闇が、意思を持ったも
ののように蠢き、カラを中心に、ゆっくりと渦を巻き始めたように
感じた。

風が起こり、あたりの木々の葉を騒がしく鳴らしていることが、
音から知ることが出来たが、そちらに目を向ける余裕を、カラは失
っていた。

身体の中にあるものを、足の裏から漉き取られていくような、お

ぞましく不快な感触に、カラは吐き気を覚え、立っていることができなくなっていた。

闇は粘りを増し、まるでカラを窒息させるかのように、渦巻きまわりついてくる。

なにが、いったい

意識が遠のき、目を開けているのか閉じてしまったのか、分からなくなっていく。

激しさを増す眩暈と息苦しさに、カラはとうとう、糸を切られた操り人形のように、ぐしゃりと崩れ落ちそうになった。

地に倒れるまでの束の間、黒闇を裂くように一閃の光が走り過ぎたのを、カラは霞んだ目の端で見た。

光を見た瞬間、強い力で腕を掴まれ、引き起こされた。同時に、鋭く熱い痛みが右頬を襲った。

「闇となりたくなれば、目を開けるんだ！」

凜と、鋭く冴え通る声に、はっとカラは目を見開いた。

顔を上げると、自分を支えるように立つ若者の白い横顔が目に入った。光もない闇に、その姿は白く浮かび上がって見えた。

徐々に意識がはつきりと、鮮明になっていくのを感じた時、闇森の主のいるはずの方角から、獣の鋭い咆哮と、呻くような男の奇声と同時に上がった。

「ぼ、僕……何がいったい？」

若者はカラの問いには答えず、その手に銀の短剣を握らせた。柄の先には、鮮やかな黄金色の宝石が光を湛えている。

「これを決して放すな。あの樹の影に入り、しばし休息を取れ。だが夜明け前には森を出ろ。家に帰ってはならない。他の人間に会わぬ、身を隠せる安全な場所に隠れておくんだ」

言葉を終えると、若者は 闇森の主 のいた黒い闇の先へと消えていった。

倒れた木々の上にある夜空には、終月の姿はもうどこにも見えなかった。

森は再び、静寂の闇に包まれていた。

3：駆け引き（後書き）

次回、4：更なる喪失に続きます。

4：更なる喪失

4：更なる喪失

気持ちが悪

薄暗い納屋の部屋で、床の上にうずくまるように転がっていた。ろくに掃除もしていない板床は埃つぽかった。息をする度に、藁くずの細かな塵と埃が吸い込まれる気もしたが、そんなことはどうでもよかった。

闇森での出来事は、たった数時間前のことなのに、もう何日も前の出来事のようにも感じられる。

だが、あの瞬間に見えた 闇森の主 の顔を思い出すと、いま起きていたことのように、背筋にどうしようもない寒気が走る。

開け放したままの窓から見える雲は、まもなく昇る太陽の光を映し、一部が薄金色に染まっている。夜明け前の冷え込みが、肌を締めつける。それも、闇森での寒さに比べたら、温かいくらいだと思った。

あれは、夢の出来事だったのかもしれない。

そう思おうとした。

しかし、右腕には 主 に掴まれた跡が残り、更になにより、いまその右手には、銀の短剣がしっかりと握られている。柄の先にある雫型の宝石は、最初に目にした時と変わらず、美しい揺らめくような光を湛えている。

「きれいだなあ……」

ぼんやりと、その優しい金色の輝きを眺め続けた。　気持ちが、ほんのりと落ち着いてくるのが分かる。

この短剣を握らされた後、あの白い若者に言われたまま、よろよると大木の下まで行き、膝を抱えうずくまった。　眩暈がいつまでも去らず、座っていても頭はぐるぐると回転しているようだった。目を閉じて、ただ回転が収まるのを待った。

その後、どれくらいそうしていたのか覚えてはいないが、立ち上がれるようになると、なんとか身体を支えながら、この部屋まで戻ってきた。

起きて、水を汲んどかなきゃ

一日の始まりは、中庭にある井戸から、母屋の脇にある炊事場と鍛冶場の四つの瓶いっぱい水を溜めておくことから始まる。

鍛冶屋の主人は、どんなに酒を飲んだ翌日も朝が早い。　主人が置き出すより早く、新鮮な水を満たしておかないと、朝一番から殴られることになる。

深いため息と共に、上半身を何とか起こした。　眩暈は治まっていたが、昨夜は忘れてしまっていた打ち身の痛みは、朝と共に戻ってきたらしい。　頬は、左に加え右も腫れているように感じる。

「いた……。　どこかに、ぶつけたっけ？」

頬に手をあてながら立ち上がると、のろりと窓辺に行き、薄い光の広がりはじめた空に、短剣をかざしてみた。

先日母屋で見た剣ほど、華やかに細工が施されているわけではな

いが、この短剣の方がより美しいと感じられた。

柄や護手の部分を細かく見ると、さりげない文様が刻まれている。滑らかな黒革の鞘の表面には、文字のような文様が五つ描かれている。抜き出した刀身にも、鞘と同じ文様が刻まれていた。

「きれいだなあ」

うつとりと見入った後、この短剣をどこに置いておこうか迷った。

(決して放すな)

若者の言葉が頭を過ぎった。

顔もよくは見えていない、見知らぬ若者。

はつきりと覚えているのは、闇を照らす月の光のように、凜と澄んだ声ぐらいだった。

前後の記憶はぼやけているのに、その言葉だけはよく覚えている。若者は家に帰るなどいつていたが、そう言われても行く当てもなかったし、隠れる場所を考える余裕も、あの時にはなかった。

そも、ここが家、かということにも疑問があった。

若者の言葉の意味を、飲み込めなかったが、全くの無視もしきれない。

「これは、やっぱり持ってたほうが、いいのかな……」

悩んだ末に、予備の腰紐を肌直に巻くと、短剣を挟みこみ、上からシャツを被せズボンに押し込んだ。シャツがだぶついているので、上から見ても、そうはわからない。

準備が整うと、急いで梯子を下り、納屋の隅にある道具置き場に向かった。

オーレンの町の中心にある教会から、木槌で叩く鐘の音が、朝の冷たい風に乗り聞こえてくる。一日の始まりの合図だ。

「急がなきゃ！」

慌ててバケツを手にし、納屋を飛び出そうとした。

さてよ

右手に提げたバケツと、空いた左手を交互に見比べた。ぎゅつと左手を握り締めると、道具置き場に駆け戻り、左手にもバケツを持ち、井戸へ急いだ。

温かくなってきたといっても、井戸の水は凍るように冷たい。

バケツに移すときに上がった飛沫が、スポンが破けてむき出しの脛にかかり、目を覚まさせる。

よしっ

毎日やっついていて、こんなに真面目にバケツと向き合ったのは初めてだった。

前屈みになり、両手にしっかりと柄を握ると、一息をついて、ぐんと背をまっすぐにした。

バケツは羽でも持っているように軽かった。

「夢じゃないよね、これ」

弾むように炊事場と井戸、井戸と鍛冶場の往復をした。どちらの瓶も、あつという間になみなみと満たされてしまった。

バケツを置き場に戻すと、次に薪小屋に向かった。炊事場と、母屋の奥部屋に薪を、鍛冶場には、特別な注文がある時に使われる

白石炭を、今日は運んでおかなくてはならない。普通の石炭とは比べ物にならぬほど燃焼が早く、刀を打つに最適とされる高温を、長時間持続する。白石炭の炎で焼かれた刀剣は、岩など相手にせぬほど、しなやかでいて頑強な、最上の一振りになるのだという。それほどのものであるがゆえ、白石炭は、値もまた通常の炭の軽く三・四倍、最上級のものとなれば、十数倍近い値もつく高級品だ。たかが炭、などと粗末には扱えはしない。ほんの僅かな欠片を落としただけでも、酷い折檻を受ける。

いつもは、ただただおつくうなだけの仕事。

だが、それをこんなにやってみたいと思ったのは、生まれて初めてだった。

運びやすいように、縄で数本ずつ括られた薪の束は、見た目より重い。小柄な分、腕も身体に合わせ長くないので、下げて持つにも抱えるにも二束がやっとだった。

薪束を五つ、地面の上で崩れないように積み重ねた。屈みこみ束の一番下にそつと手を添えると、左右から救い上げるようにゆっくりと持ち上げてみた。

笑いが自然にこぼれ、止まらなかった。

なんて軽い！　こんなの、あと二つ三つ足したって、ぜんぜん平気じゃないか！

しかし、何度挑戦しても六束以上は、重さの問題よりも嵩張り、バランスを崩し易くなってしまうことで、上手く持てはしなかった。それでも、いつもの倍以上の速さで運べることは、十分すぎる満足を与えた。

次に、白石炭の詰められた大袋を二つ準備した。これも、それまでの自分であれば一度に一袋、しかも、ヨタヨタとよろけながら、なんとかかんとか運んでいたものだったが、今日は、二袋の縛り口

をしつかり握り、肩の高さまで持ち上げると、弾むような足取りで鍛冶場に運び込んだ。もちろん、一欠けらの粒もこぼさずに。

「あんな怖い思いしたのも、無駄じゃなかったってことだよな。

闇森の主 は、気味悪かったけど、僕を騙してはなかったんだ」

その後、鶏と山羊の小屋を掃除し、餌を与え、母屋の玄関前の道を掃いても、朝食の時間までには余裕があった。それならばついでに、減った分の薪を割って、補充しておこうと思い、薪用の細めの丸太を準備した。

思ったとおり、薪を割ることも、芋でも切るかのように簡単だった。

「鉦が新品になったわけでもないのにさ、どうだい！」

鼻歌交じりに薪を割り、どんどんと小屋の中に積み重ね、重ねが乱れている箇所も、ついでに丁寧に直した。

「朝早くから薪割りの音がしていたわ。あの子、今日はずいぶん頑張っているわね」

中庭からフォーリンの、はきはきとした明るい声が聞こえてきた。こちらに向かって来ているようだった。

なんてうまいんだろう、と思った。

力が強くなった自分を見せるチャンスが、こんなに早くに来るなんて。

「薪割りはあのチビの仕事ですからね。しかし、あいつがこんな朝早くから働いているのは大方、また積んだ薪でも崩して、後始末を隠れてやっているんでしょうよ」

ついさっきの、わくわくとした喜びが一気にしばみ、暗く、どろどろとした思いが腹の中を満たした。

トランのやつ、フォーリンに取り入ろうとして、いつつも荷物持ちみたいなことをやってるんだ。どうせ今だって、野菜籠とか穀物の袋を脇に抱えてるに違いないんだ

トランは背が高く、見た目もすっきりと引き締まっていて、近所の若い娘達には人気があつた。町長の息子の一人で、しっかりした後ろ盾もあつた。そして、そんな自分の持つ当然の条件を、トランはよく心得ている。

家を継ぐことのない彼は、自身の力で生きるためにと、町の名士でもある鍛冶屋に弟子入りを志願した。町長も鍛冶屋の主人も、殊勝な心がけの若者を好ましく思っていた。

いずれは鍛冶屋の跡継ぎにという噂もある。

「そんなことを言つては、あの子が可哀相だわ。いつも懸命に働いているのに」

「働けばいい、つてもものじゃあないでしょう。」

お嬢さんは優しくすぎるんですよ。あれはただの下男、寸暇を惜しみ働くのは当然なんです。流れ者で素性の知れない子供を置いて、仕事と食事と寝床を与えているってだけで、素晴らしい行いですよ。しかしですよ、あいつがただの流れ者のガキならまだしも、あの気味の悪い瞳、普通の人間のはずがない。その証拠に、あいつ、闇森にしょっちゅう入っていることを、知っていますかね？」

こいつ、フォーリンに嘘を！僕は二回しか行ってないし、だいたい自分自身、行ったことがあるくせに

納屋の内壁に張り付くようにすると、必死に二人の話に耳をそばだてた。

「まさか、そんなことしないわよ。それに、瞳の色なら、私もこの辺りでは珍しい青よ」

「あなたの瞳は、あなたのひいおばあ様が北方の出身ですからね。青は天空の色。命の源となる水の色。神聖な色なんですよ。オーレニーの才媛と言われるあなたが、それを御存知ない、なんてことはありませんよね？」

トランは、女に一番好まれる、最高の甘い笑顔でフォーリンの顔を覗き込んだ。

フォーリンは少し頬を染め微笑むと、前に垂らしていたお下げの先を弄りながら、視線を少し先の土の上に落とした。

「でも、あの子がそんなに何度も闇森に行くなんて、考えられないわ。トランの見間違えではないの？」

「心外だな。ぼくの言葉を信じないんですか？ ぼくはね、先日あいつが飛び出した後を付けたんですよ。そうしたら、思った通り、闇森に向かった。あんな穢れた森に入るのは真つ平だから、入り口までしか見届けていないんですがね、あいつは迷うことなく奥へと進んで行っている。あの闇森を、ですよ。まっとうな者が、好き好んであんな不気味な森に入るもんですか。やつは、あの森の化物の仲間だから平気なんでしょうよ。もしくは……森には、どんな望みも叶える化物の長が棲んでいる、なんて話もありますからね、なにかしらの願いを叶えたくて、通っているのかもしれない。もっとも、そんな話を信じているとしたら、本物のバカだ」

トランは、フォーリンに自分の思うところを、声を落とすことなく話し続けている。

そして、一寸の間をおくと、さも可笑しそうな調子で言葉を続けた。

「そんなやつが、信じられますか？ あなたに思いを寄せているんですよ？」

首筋がかつと熱くなり、思わず入り口に飛び出していた。朝の光は、庭を明るく照らし始めていたが、薪小屋の中まではまだ届いていない。薄暗い薪小屋の入り口で、光に照らされている二人のうち一人を、激しく睨みつけた。むちゃくちゃに言いなじってやりたかったが、とっさに言葉は出てこなかった。

トランは、小脇に抱えた穀物袋を軽く持ち直すと、ゆったりと入り口に視線を移した。

口の端には、いつもの嫌味な笑いを浮かべている。

「そら、ごらんなさい。あの目。暗い小屋の中で光っている。まるで、獣だ」

フォーリンは、一瞬困った様子で視線を彷徨させた後、何か言葉をかけようと口を動かした。が、かける言葉が見つからないのか、困惑しているようだった。しばらく俯いて考えこむと、おそろおそろ視線を上げた。

「あ、あなた……あの、誰だったかしら？ ……あなたの名前、私、知っていたはず……よね？ それなのに」

頭が真っ白になった。

いつもこちらが気付く前に、名を呼び、言葉をかけてくれていたフォーリンが、そんな冗談を言うなんて、考えられない。僕の名を呼んでくれるのはフォーリンしかいないのに、僕の名を……ぼくの、名？

まさか

昨夜の出来事が頭に蘇った。

すつと、血の気の引くのがわかった。

トランは堪えきれないという様に、身体を曲げ、笑い声をあげた。

「こいつの名前？ そういえば名前なんてもの、こいつにもありませんでしたっけ……」

しかし、腹を抱えていたトランからも、ふつと笑いが消え、一瞬の沈黙が生まれた。

「こいつなんか、名を呼んでやる必要はないんですよ。どのみち親の顔も知らないような捨て子。名前なんて、そも、なかったんじゃないんですかね？ 子を捨てるような親だ、そんなものを捨てる子供に与えたかどうかも、怪しいもんですよ」

「勝手に僕の親の悪口まで言うなっ！ 僕には立派な名前があるんだっ。前いた町の尼僧様がいい名前だって言ってくれた、親のくれた名があるんだっ！」

思わず戸口を飛び出し、頭ひとつ半は大きなトランの胸座を掴むと、勢いよく振り回し、地面に投げ飛ばしていた。

背中を打ちつけ、すぐに起き上がれないトランの上から馬乗りに

なると、初めて見下ろすことの出来た顔に、堅く握った拳を一発見舞ってやった。

トランの顔は、屈辱に歪み、青くなっている。気位の高いトランにとつて、齒向かわれたことよりも、自分より身体的にも立場的にも格下の者に、一瞬の不意を衝かれたにしろ、無様に地に投げ転ばされ、殴られたことの方が、決して許してはならない事件だった。

トランは自分に乗りかかっている、相手の小さな身体を掴み投げようとした。

その時、フォーリンの引きつった高い悲鳴が上がった。

両手で口元を押さえ、がくがくと膝を震わせ、終には地面に座り込んでしまった。

トランもまた、投げ飛ばすはずの相手の身体を透して、青みの増し始めた空や背後の木々が見えることに、混乱をしていた。

シャツを掴んでいる手は、布を掴んでいるという感触はあるもののどこか不確かで、ただ拳を握っているだけのようにも感じられた。

「な、なんなの？ 人の身体が、光に透けて、ぼんやりとしか見えないなんて。こんなに陽が差しているのに、影がないなんて……」

フォーリンは涙目になり、完全に腰が抜けてしまっているようだった。

「ば、化物だ。 。 やっぱりこいつ、化物だったぞ！」

トランの叫びに、家中の者が庭に集ってきた。鍛冶屋の主人は、手に鉈を握っている。

「師匠、見てください！ 姿を持たぬ存在、 《影》 を持たぬ

存在、そんなものは、闇に紛れ人間を襲う魔物しかいないつ。
このチビの今の姿、まさにそれですよ！」

集った六人、すべての視線が注がれた。

こんな形で注目されることは、とても嫌だった。しかしそれ以上、いま自分に起こっていることが、とてつもなく怖ろしかった。

なんなんだ、この身体。それに名前、僕の……。なんで思
い出せない

昨夜の眩暈が戻ってきたようだった。

焦りばかりが募っていくが、何も考えがまとまらない。

《名》そして《影》。

それらは確かに、昨夜 闇森の主 と取引をした《ふたつの宝》
だ。確かに 主 は、《名》を渡したら、《名》を持ってぬ存在に
なるとは言っていた。しかし、自分すらもその《名》を忘れてし
まうなんて、どうしてそんなことを思ったろう。しかも、この透
けた身体は？ トランの服を掴んでいる感触は、確かにあるのに、
なぜ自分の身体を透して、その先にある物が見える？

《影》を渡したことで、身体が透けてしまうことは、関係がある
ことなのか。

呆然としていたスキを突かれ、トランが体勢を逆転した。透け
た身体は頼りないものの、なんとか普通の身体と同じように扱うこ
とが出来た。トランは後ろ手に押さえ、手首に縄をかけようとし
た。すると、右腰あたりに、何か硬い物があることに気付いた。

トランはシャツを捲り、隠すように挿されていた銀の短刀を見つ
けた。

「か、返せよっ！ それは僕のだぞっ」

短剣を奪われた瞬間、固唾を呑んで見つめている者達から、短い悲鳴が同時に上がった。

透けていた身体が、さらに薄れ、光に溶け消えてしまいそうになった。

トランは、手探りするように消えかけた手首を縛ると、相手の身体を地面に押し付け、片膝で身動きできないように押さえつけた。

「師匠、見て下さい！ こいつ、こんな高価な品を……これは師匠の物では？」

鍛冶屋の主人は、肉厚の手で短剣を受け取ると、しげしげと見つめた。その顔つきは、次第に険しく、色を失くしていく。

くそっ、こんな縄、いまなら引き千切るのなんか簡単なんだ

ぎりりと奥歯をかみ締め、自分を押さえつけるトランの顔を横目で睨みつけながら、縛られた手首に力を込めた。

しかし、縄がちぎれるより早く、鍛冶屋の主人に顔を踏みつけられ、眩暈を起こした。

いつもなら、こんな行いを止めに入るおかみは、フォーリンを抱え、主人の後ろに下がっている。横目で不安げに様子を伺っているのが、痛みを霞む目にも分かった。

フォーリンは、こちらを見ようともしない。

もう、歯向かう気力はなくなっていた。

4：更なる喪失（後書き）

次回、第一章最終話 5：旅立ち です。

5：旅立ち

5：旅立ち

「この化物め！ いったいこの短剣をどこから盗みやがった。これはそんじょそこらにある品じゃねえ」

鍛冶屋の主人は、透けて、下の砂粒まで見えるようになった顔を、容赦なく踏みにじった。右手の鉈を首筋に押し当てると、さらに激しく罵り、短剣の出所を問い詰めた。

なおも答えないでいると、主人は顔を執拗に踏み躪むじった。

耳の先まで真っ赤になった主人の背後から、通いの小女が、おそるおそる寄つて来ると、消え入るような声で来客があることを伝えた。

「こんな朝っぱらから誰かは知らんが、帰ってもらえつ。今は客どころじゃねえつ」

主人の剣幕に怯えた小女が、慌てて母屋に戻ろうとすると、その客人は既に中庭の入り口にまで来ていた。

「ちよ、ちよつと、お客さん、困ります！」

小女は止めようとおろおろしたが、客人の方は、気にかける様子もなく、中庭の中央へと歩みを進めていた。

あの時の、白い人だ

客人の青年は、オーレンではほとんど見る事のない、やや暗い金色の髪をしていた。

鮮やかな青色の瞳と、透けるように白い端正な顔立ちは、明らかに他国の人間のものだった。青年は何も言わず、顔を踏まれたままの少年をまず見つめ、次に、顔を踏んでいる肥満の男の手に握られた、銀の短剣に目を止めた。

「あなたが、ダーストン殿か？」

肩に羽織るフードつきの外套も、身体を包む全身の衣も真っ白だった。襟元や腰紐などの濃い鮮やかな青と、手袋や剣帯・長靴の黒茶が、その姿をきりりと引き締めている。

青年は腰に、高名な方円の騎士団ほうえんの徽章である八芒日月イタル・ユーンの紋が箔押しされた、しなやかな黒革の剣帯を締め、見るからに質の高い長剣を帯びることで、正騎士せいきしの身分であること暗示していた。

レーゲスタにおいて、正騎士（一般には騎士と称される）の称号を得られるのは、方円の騎士団という騎士・剣士の組合ギルドに、その資質を認められ、課された過酷な試練を克服し、正式な叙任の儀を受けたごく一部の者だけである。

正騎士となった者は必ず、その身分を示す、騎士団の徽章

八芒日月を、身の何処かに着けておかなければならない掟がある。青年の剣帯にある、大小二重円に、八芒の星イタルと古代ユール語を配し描かれた独特の文様は、物語の中でも幾度となく語られており、自分なりにその図形を想像していたが、本物を目にするのはこれが初めてだった。

こんな若い人が、騎士、なんだ

踏みつけにされている痛みも忘れ、目の前に現れた青年の姿に、

素直に見惚れた。

大人びた、沈着な雰囲気を纏ってはいるものの、その青年はどう見ても、トランと大差ない年齢に見える。

主人達の動揺と反し、場にそぐわないほど落ち着き払った青年の肩には、猫の倍はある黄金の毛並みの獣が座り、光る緑黄色の瞳で、獲物を狙うようにこちらを見ている。

驚くことに、その獣は嘴を持ち、背には一対の大きな翼を広げていた。

鍛冶屋の主人は、ようやく踏みつけていた少年の顔から足をはずすと、青年の上から下までを撫し付けに見た。

「ふん。お前さん。ただの騎士じゃなく 獣騎士 か。その獣。彫刻などでは見たことがある。いまじゃ、滅多にお目にかかれねえ、聖なる獣 ってやつだ」

青年は、鍛冶屋の主人の言葉には答えず、トランに近付くと、その焦茶の目を見据えた。

「放しなさい」

青年の声は、決して威嚇的なものではなかったが、トランを圧する力があつた。

解放された少年の、手の戒めを解き立ち上がらせると、青年は視線を鍛冶屋の主人に向けた。

「その短剣。それは、あなたの物ではないはずだ」

鍛冶屋の主人も、青年の言葉に一步後ずさつたが、踏みなおし、鉈を持つ手を青年に向け、嫌悪に満ちた目で二人を睨みつけた。

「騎士つてのは、何より礼節を重んじるものだって聞いている。実際、おれの所に剣を求めに来る者は、あんたらより下の剣士でさえも、まず名乗り、剣を鍛える鍛冶に敬意を払う。それがどうだ？ あんたは、見ず知らずの他人の家に許しもなく勝手に入り込み、訳の分からねえことを言いやがる。騎士は騎士といっても、所詮、獣を操る獣騎士には、そんな礼儀もないってわけか？」

嘲るような笑いを浮かべながら、主人は相手の反応を待った。

青年の肩の獣が低い唸り声を上げ、翼を広げた。しかし、青年は肩の獣にそつと手を上げただけで、主人の顔を見つめたまま何も言葉を発しなかった。

すぐに反応が返ってくると思っていた主人は、さらに顔を赤くし、声を荒げた。

「お前さんには、耳も口もあるだろう？ なんとか言ったらどうだつ」

「名乗らぬは、確かにこちらの非礼。侘びを申しましよう。

私は、アラスター・リージェス。ティルナの精霊王殿に仕える獣騎士」

鍛冶屋の者達は、皆一様に驚きの表情となった。

ティルナは、レーゲスタに神の御子エランが降り立った最初の地とされ、現在でも聖都と神聖視される、許された者しか立ち入れぬ神聖不可侵な古王国の都だ。

ティルナ大神殿（精霊王殿）は、ティルナの心臓であり、大陸全土に影響力を持つという、《精霊王》の住まう最古の神殿であった。

アラスターと名乗った青年は、淡々と言葉を続けた。

「ダーストン殿の職人としての技量の高さは耳にしている。確かに、技、だけならば一級の腕の持ち主であろうとお見受けする。だが、職人としてのあなたと、人としてのあなたは違うようだ。その違いは、剣にも少なからぬ影響を与えるものだ、私は思っている」

静かなアラスターの物言いに、鍛冶屋の主人はさらに激し、鉈を振り上げ怒りを顕にした。

「お前さんが何者だろうと、ここはおれの家で、そいつはおれの使用人だ。勝手なことはさせねえ。そのガキを置いてとっとと出て行きやがれっ」

「そ、そうだ。 そいつは盗っ人の化物だ。 そいつは裁かれなければならぬ」

トランが師匠の横に歩み出て、自己主張を始めた。 他の二人の弟子達も、その後ろに続き、何やら喚いている。

「盗み 。 この少年が何を盗んだと？」

「そいつは、これまでも色々なものをくすねようとしていたさ。そしてこの短剣だ。 こんな品、どこかの金持ちの蔵から盗み出さなけりや、こんなガキが持っているわけがねえ」

アラスターはしばらく何も言わず、男達の様子を見ていた。そして、静かに腰の剣を外すと、鞘の表面が見えるように差し出した。

「この剣の鞘に書かれている文字と、その短剣の鞘の文字は同じ。刀身にも同じ文字がある。 これは 精霊王殿 に仕える者に与

えられる神聖文字。その短剣の所有者は私。そして、それはこの少年に私が渡したものだ」

主人達は、短剣と長剣の鞘、そして刀身の文字を訝しげに見比べた。しかし、文様のような字の一つ一つが、全く同じだった。

「だ、だが、あんたが本当にティルナの獣騎士か、おれには判断ができません。それに、そいつが化物であることに変りはねえ。あなたにも、そいつの身体が透けて消えかけているのは分かるはずだ。消えかけているにも関わらずだ、気味の悪いことに触れられる身体を持ってやがる。もともとそいつの目は、あんたの獣のように光りを」

シュツという声を上げ、アラスターの肩を離れた有翼の獣は、すり抜けざま鍛冶屋の主人の頬に傷を負わせ地に下りた。主人に向き直ると、再び毛を逆立て威嚇の声を上げた。

「ガーラン。止めるんだ」

アラスターに制止され、ガーランと呼ばれた有翼獣は、再びその肩にふわりと戻った。

「失礼をした。これは昨夜獲物を逃し、気が立っている。侮辱等には敏感だ」

頬に流れる血を拭い、手に着いた赤を目にすると、主人はいきなり鉈を振り上げ、わけの分からぬ叫びを上げながらアラスターに突進した。あまりの怒りに、主人の顔は赤黒くなっている。

巨体のわりに、主人の動きは素早かった。

太く力のある腕から振り下ろされた鉈は、鋭い唸りと共に、眼前

の二人を襲った。

しかし、鉈は空を切った。

アラスターは、庇護をしていた少年の肩を押し脇に退かせた。

するりと半身を引き、主人の鉈を間際でかわすと、主人の後首を逆手で軽く打った。

突進の勢いがついていた主人の身体は、大きな音を立て、地面に突っ伏した。

倒れた際に、主人の手から放り出された短剣を静かに拾うと、アラスターは呆然と見ている少年の手に握らせた。

短剣を手にすると、消えそうに透けていた身体が、幾分しっかりとした色を取り戻した。

「この少年は連れて行きます」

一度ならぬ屈辱に、主人の目は血走り、身体は激しくわななないていた。顔中にべっとり浮かんでいた汗に砂埃が張りつき、その形相は歪み、異様な凄みを増していた。

「そ、そ、そんなことは」

「もちろん。あなたにはそれなりの対価を払わせていただく。

この少年をこれまで養って頂いたことへの謝礼と　そう、支度金と言っておきましょう」

言いながら、アラスターは剣帯に下げていた皮袋を外し、困惑した様子で成り行きを見守っていたおかみに手渡した。

おかみは、口を縛っている革紐を解き、中身を覗くと、悲鳴に近い声を上げた。

「あ、あんた。こ、公用通貨だ。ガラムだよ。二十五、いや、三十はある！」

広大なレーゲスタには、各地方独自の地域通貨があつたが、大陸全土で通用する公用の通貨も存在していた。ガラムは公用通貨最高額の金貨で、オーレンあたりでは滅多にお目にかかれないものだった。一ガラムで、平均的な家庭の一年分の収入に近い額となる。

おかみの言葉に、弟子や小女達も騒然となつた。鍛冶屋の主人も呆気にとられている様子だったが、ただトランだけが、険しい表情で、去ろうとする二人を睨みつけた。

「支度金つて、なんだ？ そのうすのろのチビを、弟子にでも取って言うのかい？ お偉い獣騎士さんとやらは」

挑発するようにせせら笑いながら、トランは言葉を投げつけた。

「そつだ」

さらりとアラスターは返答した。

その言葉に一番驚いたのは、共にいる少年だった。空想の中でだけ描けた自分 騎士になること、が本当になる？ にわかには信じられないことだった。

トランの衝撃もまた大きかった。自分は親の後を継ぐ立場になく、仕方なし田舎の鍛冶屋の跡継ぎになることにを、取りあえずの目標に立てていた。それが、よりによって最も見下していた奴が、騎士の見習 従騎士 になる？ そんなことがあつてよいものか。

「は！ その化物を騎士に？ そりゃあいい！ しかし、あんた。いったいそいつに、どこでその短剣を渡したんだ？ そいつは一日のほとんどもこの家の敷地内で過ごしている。あんたみたいな客があったら、嫌でも目につく。ひよっとして、あんたも闇森に入っているんじゃないのか？ あの化物の森で、そいつと会っていた。そうさ、その肩の獣だって、聖獣とか何とかいって、本当は闇森の化け物の一種じゃ」

トランの言葉は、終わりきらぬうちに悲鳴へと変った。

ガーランは、その主人の肩を離れると、トランの顔に覆いかぶさるように舞い下り、鋭い爪をトランの日焼けした顔に食い込ませ、地に押さえつけた。トランの顔を覆うようにたたまれた翼の間から、引き攣った悲鳴が上がる。

「私は先刻警告した。ガーランは気が立っている、と」

ガーランの名を呼び肩に戻すと、アラスターは地に伏し、両手で顔を覆っているトランの傷を確かめた。そして、他の者には聞こえぬ声で、トランの耳に囁いた。

「そなたも、闇森に入っている。森の臭いが、身に染み付くほどに。何用あつてのことかは知らぬが、ダーストン殿達も、知らぬ行為である」

うずくまったままのトランを一瞥すると、アラスターは少年の側へ戻った。

「加減はしていたようです。この薬で治療を。傷の治りが早いでしょう」

おかみに石の膏薬入れを手渡すと、短い去辞を残し、二人は中庭を出て行った。

どこへ向かっているのかは聞けなかった。

アラスターは、鍛冶屋を出てから一度だけ、名を尋ねてきた。

答えることが出来ず、ただ首を横に振った後は、沈黙の連続だった。

上目づかいに時折、ちらりちらりと白い横顔を見たが、何となく言葉が切り出せない。

陽はすっかり高くなっていた。

大地には木々の葉の濃い影が、あちらこちらに落ちている。そ

の影を見て、自分の身体に起こっている様々な変化を思い出し、手に視線を向けた。

手はやはり透けて、その先に在る物が見えた。足元に、自分の

影があった。しかし、それは、となりの青年のものとは比べ物にならないほど薄く、ないに等しいものだった。

暗く沈んだ少年に気付いてか、アラスターは道をそれた丘の上にある大樹を指差し、休もうといった。そこには、背の低い石垣が這うように、東西に伸びている。

古い時代の名残だという。

丘の上を渡る風は、爽やかで気持ちがよく、上に広がる空も、穏やかな色をしていた。

木陰の石垣に腰を下ろし、少年は、改めて自分の透けてしまった手足や身体を、確認するように見た。光が直接当たらないためか、多少しつかりと見える。

「あの……アラスター、さん？」

俯いたままの姿勢で、ようやくぼそぼそと口を開いた。

「ラスター。 親しい者はそう呼んでいる」

「僕、あの……昨日の夜のこと……」

「昨夜、君は自分が何を行ったか、知っているか？」

こちらを見ず、ラスターは言葉を続けた。

「君は自らの意思で、あれに自分の命を差し出し、呪いを受けた」

「思いがけない言葉だった。 自分の意思で命を渡した？ そんなはずはない！」

「そんなつ。 僕が 闇森の主 に渡したのは《名》と《影》で

」

「それは即ち、君自身。 《名》は光、《影》は存在。 この世界に存在する者にのみ《名》は与えられ、この世界に存在する者にしか、光は注がず、《影》は生まれない」

ラスターの言葉の意味は、半分も理解できなかった。 しかし、心臓は痛いほどに激しく打ち、酷い眩暈が襲った。

「だって、 闇森の主 は 」

あの時の 主 の言葉を思い起こした。

言わなかった！

姿は変わらない、といったが、命の保障は、最後まで明言しなかった。

「僕、このまま姿が薄くなつて……死ぬの？」

少年の震える言葉に、ラスターは初めてその姿へと視線を向けた。

「《名》と《影》を失ったものは、この光ある世界から闇の世界へと誘われる。これを死、と取るかは考え次第。ただ、君はただ完全にふたつを奪われてはいない。君に渡した短剣の石の力もあるが、君の姿は衆人に目視できる。完全にふたつを失った者の姿は、光の下では見えず、触れることも出来ない」

「短剣の石、の力？」

「オステイル 黄輝石。 光を生み、影を繋ぎ、命を護る光の貴石」

腰紐に挿していた短剣を取りだした。 石は、変らない暖かな光を揺らめかせている。

少年の横に腰を下ろすと、ラスターは木彫りのペンダントを少年の前にぶら下げた。

飴色の木で出来た、古いものだ。

「これ どこでっ？」

少年はペンダントを受け取ると、両手で覆い包むようにし、胸に押し当てた。

「それは、昨夜君がいた付近に落ちていた」

少年は、目を輝かせた。

「そうだった。このペンダントには僕の名が彫られているって、尼僧様が言ってた。

ほら、この裏側に」

しかし、少年の喜びは瞬時に消え去り、ふたたび薄暗い沈鬱な表情となった。少年の手から、ペンダントを受け取ったラスターは、その細部にまでしっかりと目を向けた。

「それ……その裏側に、僕の名前が彫ってあるって、尼僧様は言っただ。でも、その字も……なくなっちゃってる……」

ペンダントの裏面は、鑢で削りでもしたかのように磨り減り、何も読み取れなかった。

「変らぬ光と風の護りを わが子カラの幸せを ただ望む
古い北方の文字だ」

ラスターは再びペンダントをカラに手渡し、側面に彫られた小さな模様を示した。

「カラ。“息吹”という意味の北方の古語だ。おそらくは、君の呼び名だろう」

カラ。カラ 確かに、自分はそう呼ばれていた気がする。

はつきりとした自信は持てなかったが、耳が、心が、知っていると反応をしている。

じわりと暖かな気持ち胸に満ちた。
名も顔も知らぬ両親の存在を、初めて、確かなものに感じた。

「しかし、完全な《名》ではないだろう。《名》は欠けてはならない。完全なものを持つていなければ、その持つ意味は取り戻せない。しかも君はあれの呪いを受けている。周囲の者は、誰一人、君のその呼び名すら、記憶に留める事は出来ない。君、自身もだ」

カラは大きく息を吸った。

「僕は……僕はどうしたらいい？ どうしたら、元に、元の姿に戻れるの？」

さすがのようにラスターを見つめた。しかし、ラスターは前を見つめたまま、しばらく何も答えなかった。

「君は、どうすればよいと考える？」

ラスターの声は、とても静かだった。目に映る足元の黄花草が、風に吹かれ緩やかに揺れている。

「返してもらおう。闇森の主から、《ふたつの宝》を、《名》と《影》を……取り返して、呪いを解いてもらう」

カラは、自分の言葉に自分で怖れを感じていた。

闇森の主から取り返す？ あの虚ろで不気味で怖ろしい闇森の主、自分のような子供が、どうやって挑めばよいのか？

「でも、そんなこと……僕に」

どこに行っていたのか、ガーランが鋭い鳴き声と共に、大きく羽ばたきながら戻ってきた。ラスターの肩にふわりと下りると、主人に向かい数回、何かを告げるように鳴いた。

「あれは、北に向かったようだ」

ガーランの喉元を優しく撫ぜながら、ラスターは静かに立ち上がった。

「私と共に、来るか？」

ラスターの髪が、風になびき輝いている。
青の瞳が、真っ直ぐにカラを見た。

「僕を、騎士の見習にしてくれるって、本当？ 騎士になったら、僕は、闇森の主と闘って 《名》と《影》を、《ふたつの宝》を、取り戻せる？」

不安な、すぎるような気持ちで、カラはラスターを見上げた。
ラスターは、カラの視線を静かに受け止めると、その金の瞳を確かめるように、長い時間見つめていた。

「まずは、旅の支度を。先々の話は、それからだ」

ラスターは、ゆっくりと丘を下り始めていた。
驚きに固まっていたカラは、慌ててペンダントを首から提げると、ラスターの後を追いつ、転げるように、坂を駆け下りていった。

第一章
終

5：旅立ち（後書き）

次回、第二章『聖獣狩り』に、話は続いてゆきますが、この第一章『ふたつの宝』は、この回で終了となります。

お疲れ様でした。

ここまで読んで頂き、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9262g/>

新レーゲスタ創世譚 第一章 『ふたつの宝』

2011年2月17日14時17分発行